

矢嶋 剛 のコラム歴①（中日新聞・夕刊に 月1回×50回掲載）

2003年6月13日付けの一文です。タイトルは「おやつ」。第43回目。
このコラムのテーマは「消費の風景」。欲しいなあと思っけていても、
見つからないでしょ！（＝チャンス） という構図を念頭に置きながら。
ご参考になれば幸いです。 矢嶋 剛

休日の午後三時。いつもより少し遅く起き、昼食も済ませ、なおのんびりするも何かアクセントが欲しくなる時間帯だ。その役をおやつが快く引き受けてくれる。おやつの種類は多い。和菓子や洋菓子はもちろんだが、果実も、水菓子という粋な名を持つ。ときには、新鮮な野菜も漬物もおやつに加わる。これらのおやつは、季節を告げてくれる。たとえば、くず桜、甘夏のゼリー、焼き栗。いずれも目の前に出てきた瞬間に、季節が食卓を包み込む。

行事に欠かせないおやつも多種多彩である。ひなあられや柏餅、クリスマスケーキが有名どころか。きっと土地それぞれで、おやつが家々の歳時記を編んでいるのだろう。

おやつは、飲み物とともにあることで、その魅力を増す。今年漬けた小梅数粒を茎茶とともにいただく。胡桃の味が濃い月餅を烏龍茶で食す。深煎りのコーヒーを飲みながら、苦味の効いたチョコレートをかじってみる、等等。いちいち上げていては枚挙にいとまがない。その好みは百人百様。一度論じれば、たちまち百家争鳴の呈を成すこと、まず間違いない。それほど、おやつは楽しい。

おやつを子供のものと決めたり、職場で配られる菓子だと割り切ったりすれば、その方のおやつの世界も限りあるものに留まる。ところが、おやつの楽しさを自覚すると、その深さに圧倒される。そして、お気に入りのおやつをどう手に入れるかを考え始める。しかし、気に入りのおやつなどそうそうあるわけではない。

時間と機会に恵まれている方なら、おやつをご自身で作ることもできる。しかし、忙しい身ではそうはいかない。結局、どこかで買い求めるしかない。まあ、百貨店へ行けば、全国の有名な菓子が一個単位で買える売り場があり、何かと重宝している。しかし、少し遠いか。



通信販売という手もある。これはこれで便利なのだが、生菓子の類はやはり難がある。何かよい手はないものか。

一番ありがたいのは、気に入りのおやつを売っている店が近所にあることだ。美味しい煎餅やあられを作っている店や、飾らないけれど美味しいケーキを作り続ける店。こんな店があるに越したことはない。

しかし、これこそが難しい。気に入りのおやつを供する店は簡単に出来ない。このジレンマを克服する最終手段は、居を移す手か。もしかすると、そんな人は結構いるかもしれない。憶測は京都を歩くと強まる。この街には羨ましいほど、和菓子店が辻々にある。

二〇〇三年六月一三日

矢嶋 剛

*後日談

この文章は、国立国語研究所の日本語データベースKOTONOHAに収集されるかもしれません。

※後日談に書いた通り、この文章が、国立国語研究所の日本語データベースKOTONOHAに収録されているかもしれません。同研究所からの依頼を許諾しています。

※この文は、webサイト掲載のための復刻修正版です。新聞掲載時から修正している部分があります。

※この文の著作権は矢嶋 剛が保有しています。著作権法の例外を除き、無断複製・無断転載はできません。

※著者・矢嶋への連絡は、thanks@yajima-story.tokyo までお願いいたします。